
近世アジアの皮革 1. 中国の甲冑と衣服

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

革は大昔から服飾や武具、什器などに使用され、その使われ方は時代の生活様式に伴って変化してきた。中国の服装制度は古くは周代に見られ、後漢代に整えられた。14世紀後半に蒙古民族の元が滅び、漢民族の明の時代となり、遊牧騎馬民族の胡服すなわち筒袖の短い上衣とズボンに革バンド、革製の半長靴という様式から、広袖、寛衣、長裾の復古調の深衣様式に変わった。明代の中期になると、海上交通が発達し、ヨーロッパとの交易が盛んとなり、ヨーロッパの文化が伝わってきた。17世紀には満州族の支配となり、胡服が復活した。しかし民衆の間では、両民族の胡服と深衣が折衷されていた。中国は広大な領土の国であり、多くの民族がそれぞれ独特の生活様式を有しており、皮革や毛皮の利用も様々である。

2. 甲冑

中国においては、革甲冑は青銅器時代の防具として使用され、戦国時代初期には全盛期を迎えた。湖北省の戦国前期の曾侯乙墓からは多数の牛皮製漆塗り革甲冑が出土している¹⁾。その後、鉄製の道具や武器が使用され始め、それと同時に鉄製甲冑が使用され、しだいに増加し、秦・漢時代には主流になった。しかし隋代以降も皮革は甲冑の素材として使用された。元代でも革甲

が使用されていたことは山西省で出土した彩色騎兵俑から推測できる¹⁾。この革甲は大きな一枚革で作られた胴着のように見える。皮は犀や兕（水牛に似た一角獣）、牛の皮が主に使用された。明代初期は残存する蒙古族との戦闘が激しく、火器や甲冑の製造技術が発達した。また沿岸部の倭寇との闘争には民間人の武装化が行われ、皮革や牛角、籐等が用いられた。中期には西洋から大砲が伝来し、これまでの甲冑では無力となり、大多数が鋼鉄製の環を繋ぎあわせた鎖子甲となった。鉄甲片を布で覆った布面甲や綿を布で縫った綿甲も使用された。山西省の粟菴美墓の墓道に明代中期の甲冑を付けた武将彫像があり、その冑は革の甲片を鋸でつなぎ、腹部の甲は絹布か薄い革に甲片を縫い付けてあるように見える。さらに腕の甲や腰部と尻部の厚い2片の甲も革製に見える。明代末の図説「武備志」や「三才図会」等には、甲冑の素材として、鉄や皮革のほかに角、絹、紙が挙げられ、鉄の環を繋ぎ合わせた鋼絲連環甲や皮製の甲、藤蔓を編んだ赤藤甲、鋼鉄製の唐猊鎧が載っている^{2, 3)}。

明代のイ族の革甲が涼山イ族地区（四川省西昌県）に多数保存されている（図1）¹⁾。盔は3枚の丸い革を頂部と両耳部分に革紐かぶとでつないで組み合わせたものであり、甲身の腰から上は10枚の大きな革で胸と背、肋を覆い、腰周りは5列につないだ小革片を



図1 明代イ族の革甲復原図



図2 チベット族の革甲

綴じている。さらに腕と膝は1枚の革で覆っている。甲冑の表面は漆が塗られ、その上に紋様が描かれ、さらに銀で飾りが象嵌されたものもある。この革甲の製造は清代も続いた。なお清代のイ族の彩漆皮鎧が民族衣装として中国歴史博物館に収蔵されている⁴⁾。

19世紀あるいはもっと以前と思われるチベットの鎧は革と羊皮紙の薄片で出来ている裾の長いものである(図2 長さ114cm、幅90cm)^{5) 6)}。甲身は約8×3cmの大きさの薄片を40個から110個を皮革の紐で部分的に重ね並べ、それを19列上下に綴じてあり、肩当ては20個の薄片を重ねたものを7列綴じてある。薄片はラッカー(シェラックのアルコール溶解物)が塗られ、一部が赤く彩色され、銀箔が施されている。

清代の甲冑は甲片が表面に露出した明甲、露出しない暗甲、綿甲、鎖子甲などであった。明甲も暗甲も鉄甲であるが、護膊(肩当て)の下地に皮を用いた。火器の性

能が向上し、さらに小銃や大砲などの兵器の発達により、従来の甲冑が役に立たなくなり、中・後期には甲冑が廃止され、軍服に代わった。甲冑は中期以降一種の装飾として閱兵などの典礼時にのみ使用された。清代に編纂された「欽定大清会典図」によると、皇帝大閱の甲は明黄色の緞(厚い絹織物 緞子)製であり、冑は革製で漆が塗ってある⁷⁾。乾隆帝(在位1736~96)の大閱甲は60万の鋼片を用いた明甲で、金線で刺繍されており、冑は牛皮製であった⁸⁾。旗色によって組織された八旗兵の甲は綿甲であるが、冑は牛皮製であった。身分によって革の他に鉄または綿の冑もあり、これらを絹で覆い、その頂部の飾りに身分によって貂や獾、牛の尾が使用された。

3. 衣服

明代には祭祀や朝儀の時に着用する服装が定められ、元代のモンゴル族の服飾から漢民族の服飾へと制度的に変化したが、満

州族の清代になると、騎馬民族の胡服様式にもどった。袖の広い袍服から筒形の袍服に変化した。明の皇帝が着用した玄衣（黒い上衣）や絳紗袍（赤い絹製の長着）には皮革類の使用は無いが、清代の冬朝服には部分的に毛皮が使用されている。朝服は龍の文様が刺繍してあり、色が基本的には明黄色であり、皇帝と皇太子の冬服には披領（襟を覆うもの）および裳（もすそ）に紫貂を用い、袖端に薰貂を用いた（図3）⁷⁾。康熙帝や乾隆帝の朝服図によると、紫貂と薰貂の毛色は共に黒褐色であり、差異がほとんどない⁸⁾。皇帝の冬旅行の裳には鹿皮或は黒狐が用いられた。

清の武官は補服（常服）や行袍（軍服）を着るときには行掛（馬掛）という上着を着る必要があった。これには単衣と袷、毛皮があり、毛皮のものを端罩と称した^{1, 8, 9)}。端罩は身分によって、貂・大山猫・猿・豹・狐の毛皮を使用し、裏地も身分によって色の異なる緞子を用いた。皇帝と皇子のものは黒狐あるいは紫貂とあり、裏地は明黄あるいは金黄とあり、さらに親王や群王、貴族らのものは青狐で裏地が月白（青みかかった白色）であった（図3）⁷⁾。侍衛のものは紅狐皮あるいは黄狐皮であった。

清代末の北京の年中行事を記した「燕京歳時記」によれば、冬至月（11月）朔日に

一斉に貂裘^{てんきゅう}を着用するとあり、元旦には王公や役人がそれを着て朝廷に拝賀するとある¹⁰⁾。貂裘は裏に貂の皮を付けた上着であり、文官は三品以上、武官は二品以上の者が着用を許された。

冠は祭事や日常の儀礼に被られ、身分によって形や材質が異なった。明代の皇帝袞冕^{こんべん}は円柱形の冠の上に板をのせたものであり、夏用は玉草、冬用は皮革を用い、表を黒色紗で裏を朱色紗で装飾しているが、羔裘^{きょう}や毳^{ぜい}（毛織物）の冠もあった。日常用の委貌^{いぼう}と皮弁^{ひべん}は同形であるが、前者は黒絹製で、後者が鹿皮製である。清代になると、冠形から胡服様式のつばのないお椀形になり、官服の冬の冠は毛皮で縁取りをして紅緯（紅色の房）を冠頂に結び、頂座の上に孔雀の尾羽を挿した。皇帝や皇子、親王は海龍（ラッコ）、薰貂、紫貂、黒狐、青狐、黒羔の毛皮を用いた（図3）⁸⁾。なお夏の冠は玉草または藤糸、竹糸で編んだ笠状のものであった。

貂は主に黒竜江（アムール川）流域と北部の森林地帯、長白山脈地方に生息する動物であり、紫貂はクロテンのことである。動物図鑑等では、この地方に生息する貂はクロテンとキエリテンとあるので、薰貂はキエリテンのことかもしれない。明代を記した書「大明会典」には、北狄韃靼と東北



図3 清代皇帝の冠服
（左より、冬朝冠・冬朝服・端罩）

夷女直からの毛皮貢物に貂鼠（貂）皮があり、さらに後者には舎列孫（大山猫）皮が記されている¹¹⁾。朝鮮でも貂皮は貴重品であり、王朝は中国東北部から交易により手に入れ、その一部を明朝へ貢納した¹²⁾。清朝政府も周辺地域から毛皮を貢納させており、1650年代の中頃よりロシアからの使節団により毛皮や皮革がもたらされ、その後、交易により、シベリア産の貂皮が多量に輸入された。

4. 少数民族の服飾

中国には漢族の他に全人口の約6%を占める55の少数民族が存在しており、それぞれ特色のある服装をしている^{5, 13, 14)}。その中で素材として皮革も用いられている。特に蒙古高原や東北平原の気候の寒い地域に住む種族は革の袍（パオ）に帯を締め、毛皮の帽子を被り、革靴・長靴を履いている。主に新疆ウイグル自治区や甘粛省などに住む回族の男女は紅頂貂緑帽を被り、革靴を履いている。カザフ族も紅白の皮縁帽を被り、革靴を履く。ウイグル族やキリギス族、タタール族は革靴や長靴を履いている。チベット族の長い袍は男女ほぼ同形であり、裏が獣皮で、表が羅紗（毛織物）であり、衿や袖、裾の縁のところは広く毛皮の部分折り返して出す。あるいはプル（羊毛織物）や豹皮、獺皮で縁取りされている。男性用に革の袍もある。長靴は毛織物と皮革をつなぎ合わせ、表を色布で装飾する。帽子は毛皮や毛氈で作る。チベットのプルや絨毯は明代より貴重品であった。ウイグル族の絨毯も世界に知られている。メンパ族も毛皮の袍を着る。ロツパ族は袍の上に革あるいはフェルトのチョッキを着て革靴あるいは長靴を履き、熊の毛皮帽を被る。熊の毛皮帽は動物を招きよせ、自身の勇敢さを表している。四川省のチャン族の男女は



図4 オロチョン族の少年の服装

羊の毛皮のチョッキを裏にして着用している。イ族は羊毛織物や羊皮を羽織っている。中国東北部に住むホジェン族は冬に貂の帽子を被り、狐の毛皮を着る。衣類は魚皮を用いて作る。主に黒竜江省に住むオロチョン族は冬と春に男女とも革の袍を着、革の帽子を被る。狩猟時には狐皮の大きな帽子を被る。多くは魚皮の靴や手袋を使用する。ノロジカの頭で作った帽子はこの民族の特徴であり、図4（2006年上海博物館で筆者検分）は子供であるが、大人も被る。ホーチョ族は漁業を生業とし、魚皮の衣服やズボン、靴を着用し、冬には革や毛皮の袍を着用し、衿や袖には毛皮を出している。なお北海道の多くの博物館にはアイヌ民族が着用した魚皮の衣類や靴などが展示されている。雲南省のナシ族は羊皮の肩掛けを羽織り、ペー族の男性は鹿皮のチョッキを着ている。

5. まとめ

中国においては、革甲冑は古くから防具

として使用され、戦国時代初期には全盛期を迎えた。その後、鉄製甲冑が使用されたが、隋代以降も皮革は甲冑の素材として使用された。皮は犀や兕(水牛に似た一角獣)、牛の皮が主に使用された。明代のイ族の革甲が多数保存されている。しかし明代中期には西洋から大砲が伝来し、これまでの甲冑では無力となり、大多数が鋼鉄製の環を繋ぎあわせた鎖子甲となった。兵器の発達に伴い、中・後期には甲冑が廃止され、軍服に変わった。

清代の皇族礼服の衿や裾、袖口に貂の毛皮が使用され、元旦には王公や役人が貂裘を着て朝廷に拝賀した。

多数の少数民族は革や毛皮を民族衣装に取り入れている。

- 10) 敦崇著, 小野勝年訳: 燕京歳時記, 東洋文庫 83, 平凡社 (1971) P.206.
- 11) 李東陽等奉勅撰, 中時行等奉勅重修: 大明会典, 台北東南書報社 (1971) P. 1603.
- 12) 西村三郎: 毛皮と人間の歴史, 紀伊国屋書店 (2003) P. 187, 252.
- 13) 華梅著, 施潔民訳: 中国服装史, 白帝社 (2003) P. 201.
- 14) 美乃美: 中国少数民族の服飾, 中国中央民俗学院, 中国人民美術出版社 (1981) P. 32.

文 献

- 1) 劉永華著, 春日井明監訳: 中国古代甲冑図鑑, アベクト (1998) P. 161, 173, 189, 204.
- 2) 茅元儀撰: 武備志, 和刻本明清資料集 4, 古典研究会 (1994) P. 1096.
- 3) 王圻著, 王思義編: 三才図会, 衣服 3, 上海古籍出版 (1988) P. 1136, 1534.
- 4) 沈從文, 王子編著, 吉田真一 栗城延江訳: 中国古代の服飾研究 増補版, 京都書院 (1995) P. 492~510, 519.
- 5) Deutsches Ledermuseum/Schuhmuseum, Katalog zur Ausstellung, Offenbach (2012) P. 135.
- 6) Deutsches Ledermuseum angeschlossen Deutsches Schuhmuseum, (1956) P. 87.
- 7) 崑, 岡等奉勅纂: 欽定大清会典図 二, 三, 台湾中文書局 (1886) P. 1853, 1885, 2017.
- 8) 黄鋼, 原娟娟 黄能福編: 中華服飾七千年, 清華大学出版社, 北京 (2011) 三-P. 2, 174, 四-P. 246.
- 9) 杉本正年: 中国服装史, 服飾百科増補版, 文化出版局 (1976) p. 654.